

調布三曲協会創立二十五周年記念演奏会



韻  
今  
と

## 三曲協会創立三十五周年を迎えて



調布三曲協会

会長 渡辺 泰子

春 闌の頃となりました。

皆様には、ますます御健やかにおすごしのことと存じます。

さて、私も調布三曲協会も此度創立三十五周年を迎え、ここに記念演奏会を開催させていただく事ができました。これもひとえに皆様方のご支援の賜物と深く感謝致しております。

三十五年という年月は、けっして短いものではありませんが、それより以前に数百年にも亘る先人の歩みがありました。今、私達が手にすることのできた音楽は大勢の人々の喜び、やすらぎとともに育まれたものでありましょう。

本日は長く伝えられてきた曲、あるいは新しい感性により生まれた曲を、会員力を合わせて取り組みまして聴いていただきますが、これが皆様にとって春の良い一時となりますよう心より願っております。これからも変わらぬご支援をよろしくお願い申し上げます。本日の御挨拶とさせていただきます。

## 調布三曲協会創立三十五周年を祝して

調布市長

吉尾 勝 征



調布三曲協会創立三十五周年おめでとうございます。心からお祝い申し上げます。

三曲協会の皆さま方には、協会結成当初から調布市文化協会に加盟されて、地域文化の構築と振興に取り組まれたり、市民文化祭への参加や調布市の基本計画の一つである「ゆたかな文化と人を誇れるまちづくり」にもお力添えを賜り、心から敬意を表し感謝申し上げます。

古今東西を問わず音楽というものは、人々を楽しませるものでありますが、私たち日本人にとりまして邦楽器の音色には、やさしげや温もりというような格別のものがあるように思われます。

このような素晴らしい伝統のある音色を本日ここに、三曲協会創立三十五周年記念の演奏会として開催されますことは、大きな喜びであります。

これからも、先人の長きにわたる伝統を守り育て、たゆまぬ自己研鑽を重ねられますようお願い申し上げます。

市といたしましても、芸術・文化の振興を図ることを目的とした調布市・文化コミュニティ振興財団を平成七年に設立し、質の高い事業を展開するとともに、市民の皆さんの自主的な芸術・文化活動を支援してまいります。

本日の演奏会にあたり、調布三曲協会のますますのご発展とご活躍、さらに皆さま方のご健勝と多幸をお祈り申し上げます、ご挨拶といたします。

## 祝 辞



調布市文化協会

会長 連代義明

新芽が満ちたる好季節となり、ここに調布三曲協会創立三十五周年記念演奏会がかくも盛大に開催されますことに心よりお慶び申し上げます。

調布三曲協会は昨年文化協会が三十周年を迎えましたが、それよりも長い歴史に驚くと共に三曲協会の先輩諸氏に敬意を表します。また三曲協会はいつも文化協会に率先して文化活動にご協力いただいていることに心より感謝申し上げます。

三曲は日本古来の伝統芸能の一つとして現代に受け継がれて来た事は素晴らしい限りです。

豊かな文化の街、調布に三曲協会があることに文化協会は限りない力を感じます。また今日は三曲協会の皆様の奏でる邦楽の音色に耳を傾ける大勢の人々の心にもいつまでも残ることと共に邦楽の真髄をいつまでも聴かせて下さい。

最後に調布三曲協会の益々の隆盛発展と会員皆様のご健勝を心よりご祈念申し上げます。ご挨拶と致します。

演奏曲目

一、みすうみの詩

二、高麗の春

三、南部半追唄具による

幻想曲

四、吉野静

五、箏四重奏曲

六、五段砦

七、ままの川

八、木もれび

九、桜狩

十、つるのおんがー

# こみぎよの詩

作曲 森岡 一章

第一箏 山下 繁雄

第二箏 松田 孝子

ピアノ 間橋 洋子

尺八 三輪 輝夫

この曲は、昭和四十一年に森岡章により作曲されたもので、箏二部と尺八、ピアノによる四重奏曲です。湖の夜明け、昼、夜と三つの構成からなり、それぞれ各章をとのえてあります。

静かな湖、

あるときは偉大なる姿、

湖のおもての情景を思いうかべていただけたらと思います。

# 湖

## 二 高麗の春

作曲 宮城道雄  
作詞 石橋令邑

箏 中西賀代子

三絃 佐藤吉和

尺八 橋本洋

高麗とは、朝鮮半島をさす古い名称で、その頃の朝鮮の早春の景色や風俗を詠んだ歌詞に宮城道雄が作曲したものです。前弾は厳しい冬から春にかけての情調をよく現しています。朝鮮ではふつう白衣を穿いますが、これを洗濯するのに川岸にて岩石の上へのせ、よごれを落とす音は、あたかも日本でのきぬたの音に似て衣の多く水に浸った所あるいはそうでない部分で打つ音が高く低くきこえ旅人には非常に面白く思われます。これが手事では調絃の工夫もあり流暢に聞きとれます。

曲の形体は古典的でありながら三種の楽器の音型が交錯する独特な三重奏であるので、古典とは少し趣きが違う華やかなものになっています。





三、南部牛追唄によう

幻想曲

作曲 山川直春

箏 村岡ふみ

尺八 門傳良男

「南部牛追唄」は、昔、今の岩手県の山の中、沢内方面から南部藩に納めるお蔵米を何頭もの牛の背に積み、遠く和賀川にそって野宿を重ねながら遙かな山道を下って行った労働者（牛追い）達が唄ったものであります。この郷愁に満ちた牛追唄に魅かれていた作曲家が昭和二十六年の第二回邦楽コンクールの為にその旋律を基にして幻想曲風な尺八、箏二重奏曲を書き、作曲部門の第一位に入賞し、文部大臣奨励賞を得たのがこの曲です。日本民謡を真正面から堂々と迎え入れたこの曲の入賞はその後三曲界にもこうした風潮の盛んになった一つのきっかけをなしたものと思われます。

愁

# 四言野静

作曲 筑紫歌都子

箏本手 駒井孝子

唄

角田央子

箏替手

尺八 橋本洋

この曲は、源義経の愛妾静御前を題材として取り上げたものです。

曲の特徴としては箏の調絃に関して隣り合う二本の絃を同音として琵琶の雰囲気をもし出していることです。

尺八のソロで、落ち行く静御前の寂しく悲しい足どりを作曲者特有の情景あふれる表現で展開し、前唄の寂しいやるせない気持ち唄、箏、尺八の絡みのなかで自在に表現しています。

また記憶の中にある合戦の思い出、鶴岡八幡宮での舞の思い出が次々によみがえり、この曲の頂点に達します。静御前のやるせない気持ちを強烈に唄いあげた曲です。



# 五 第四重奏曲

作曲 長沢勝俊

## 第一箏

渡辺泰子  
角岡暁子

## 第二箏

美蔦洋子  
田村博寿

## 第三箏

桑島ナツエ  
原田眞樹子

## 十七絃

石森康雄  
田代せつ子

箏の三つのパートに十七絃を加えた四重奏曲で、曲は二つの楽章よりできており一章は緩、二章は急という構成をとっています。

箏の調絃は古典にみられる五音音階ではなくディアトニック風な調絃によりさまざまな和音の変化に対応できるよう留意されています。

箏のもっている古典的な奏法は極力ひかえ、個による語りかけより、それぞれの奏者による対話とダイナミックな変化に重点をおき、さらにオスティナートや変拍子を用いることにより、四重奏曲としての純器楽的な表現に新しい息吹きを与えようとしたものです。

# 四重奏

# 六、五段砧

作曲 光崎 檢校

箏高音 村岡 ふみ

箏低音 山下 繁雄

「砧」とは「きぬいた」が略されて「きぬた」と言うようになったものです。布を板の上に置きそれを棒で叩いて軟らかくしたり艶を出したりしたことを言います。どこからともなく響いてくる遠砧の音は、名月や虫の音と共に、重要な秋の風情でありました。地唄や箏曲の中には、砧のリズムを取り入れた曲が多く、「砧もの」とよばれています。前唄として、「三段獅子」の前唄と手事の初めの部分を必ず弾くことになっており、三味線ものの「四段砧」も同じ構成になっています。前唄の歌詞は、花やもみじの名所にかけて、当時の高名な遊女の名前をうたいこんでいます。作曲者の光崎檢校はこの曲の完成に至るまで五年を要したと伝えられています。

新

下  
た  
か  
の  
り  
ん

作曲 (箏) 菊岡 檢校  
(三絃) 松野 檢校  
作詞 宮腰 夢蝶

箏  
田代 せつ子  
桑島 ナツエ

三絃(唄)  
田村 博寿  
吉川 和博

天保年間、京都の宮腰夢蝶の歌に松野檢校、菊岡檢校が  
作曲した上方唄で

思いが深く絶えない「思い川」

慕う心を川になぞらえた「妹背の川」

どうしようもない我が身を成りゆきにまかせねばならぬ

「俣の川」と三つの川を詠みこんではかなくままならぬ

身の遊女の恋を歌ったものです。

なお、詞章に作詞者の夢蝶の名が

「夢てふ廓に住みながら」と詠み込まれています。

手事もちらしも短く、手事物といいながらむしろ端歌物

のような、濃い情感を呼び起こされる歌が大変印象的な

曲と言えますよう。

夢

# ハノモルビ

作曲 吉崎克彦

箏 松田孝子

三絃 角岡暁子

十七絃 中西賀代子

昭和六十三年三月に吉崎克彦により作曲されました。この曲には「光と波と」との副題がつけられていて作曲者は次の様にのべています。

「深閑とした緑輝く森に入るとそこは静かな深い藍色の世界へと変わって行く。荘嚴な藍色に包まれて人間的情感が次第に希薄になる。見上げると木もれびが、ひんやりとした空気を差し、そこに緑を取り戻そうとしている。そして風がそよぎ、光を波のようには動かしに行く。」



九、  
桜狩

作曲 山田 検校

箏

美 蔦 洋 子  
吉 川 和 博

三 絃 田 村 博 寿

山田流中許の七曲のうちの一つで傑作として重んぜられておりそれだけに難曲です。

歌詞は桜を求めて都を出る道行から桜の下で日を過ごし、夕方帰る際になお名残りを惜しむ、といった展開で、全文古歌を引用した美文で綴られています。時間的推移と場面転換にも、すぎのない見事な構成となっていて、合の手は山田検校の作品中最も長く、全山満開の桜の中を行くような絢爛とした華やかさに満ちた曲に作られています。

花

# 十、つるのぶんがし

作曲 宮田 耕八朗  
文 松谷 みよ子

語り

渡辺 泰子  
石森 康雄

第一箏

美 蔦 洋子  
原 田 真樹子

第二箏

角 岡 暁子  
井 坂 糸子

十七絃

田 代 せつ子

尺八

門 傳 良男  
三 輪 輝夫

この物語はいろいろな絵や音楽、演劇等を通じ、どなたにとっても大変親しみのある美しいお話だと思いが、本日はスライドの絵とともに語りと邦楽器の音色、旋律を楽しんでいただきます。

幼い頃、母のひざに抱かれて絵本を読みかかせてもらった時のように何度耳にしてもなつかしい気持ちに再び浸っていただけたと思います。

どうぞ「つう」と一緒に純粹な子ども頃の楽しかった事や忘れていた大切な思い出を、縦糸横糸にして皆さんの心の綾錦を織ってみてください。

つる



歌詞

二、高麗の春

冬ごもり 春さり来れば  
高麗の山粧ひ凝らす。白妙の  
雪もいつしかむら消えて 末は  
合はんと雪解水 流れてやまぬ  
山の峽。儒臣の夢も滅びては  
草萌えしるき墓どころ。  
里に出づればいささ川  
えにしも知らず行き通ふ  
石橋渡る鄙人に 隔てもおかぬ  
御恵みや。うららかさ ひねもす  
岸に衣洗ふ高麗乙女らが水砧  
城外の春風光りつづく芝山  
そちこちに干す白衣のひま縫うて  
行く水 早やもぬるみけり

四、吉野静

別れにし 人は何処とみよしのの  
吉野の山に花散ろふ  
定めなき世の行く末を  
鳴きてか来らん呼子鳥  
静や静 静や静 静のおだまき  
繰り返し 返しし人を偲びつつ  
今も恨みの衣川 思い返せば古の  
心も融けぬ舞の袖 返す返すも  
怨めしく吹雪とまがう花嵐  
静や静 静や静 静のおだまき  
繰り返し 昔を今に  
成す良しもがな

六、五段砧

花は吉野よ  
紅葉は高尾  
松はからさき 霞はとやま  
いつも常盤のふりは  
さんさし しほらしや  
とにかく思はるる

七、ままの川

夢が浮き世か 浮き世が夢か  
夢てふ廓に住みながら  
人目は恋と思ひ川  
うそも情もただ口先で  
一夜流れの妹背の川を  
その水くさき心から  
よその香りを袷袖口に  
つけて通はば 何のまあ  
可愛い可愛い鳥の声に  
さめてくやしき ああままの川

九、桜狩

のどかなる頃も如月おしなべて見渡す山も  
うちけぶり、柳の糸の浅みどり（春の錦かあやなくも  
都にしらぬ白雲の、たてるやしるべ桜狩、人の心もあこがるる）  
空を見すてて越路には、待つらむものを行く雁のかをる  
かをるつばさは雲に消え、声はあはれに聞こゆなり  
（ゆくへ慕いて立ちどまり、名残りはしばし忘れねど）  
初花ぐるまめぐる日の、ながえつらねて見ずもあらず  
見もせぬ人や花の友、知るも知らぬも花のかけ、あひやどり  
して菅の根の、長き春日もいたづらに、日数すこして花衣  
なれしたもとも香にそみて、野辺も山べも花ゆえにいたらぬくまは  
なければ、山の山の岩根をとめて落つる、千すじ百すじ左保姫の  
手びきの糸のたきなくば、手折りて行かむ人相の鐘よりさきに  
春がすみ、立ちなかくしそ風は吹くとも。

終演予定 四時三十分

表紙 柳 清司  
題字 淺野 明尾  
印刷 (株)天沼印刷

舞台監督 升川 義弘  
司會 大塚 美和  
照明音響 東京舞台  
記録写真 調布写真連盟  
箏屋 一藤 樂器

調布三曲協会事務局

石 森 康 雄

〒一八二

調布市染地二―二―二二

電話〇四二四(八三) 三七六七



調布市文化会館たづくり

☎〇四二四(四二)六二二一

京王線

調布駅南口より徒歩三分

